

外為マンスレビューI 北米編

先月までの為替相場のレビューと、
今後の注目の経済指標やイベントを元に、為替相場の展望をお届けします。

2012/02/01

「欧州債務問題」を主軸とする相場が続く

通貨ペア	基調		ページ数
ドル/円	➡	円売り介入観測がもたげる	2 - 3
		予想レンジ: 75.20 ~ 78.50 円	
カナダ/円	➡	欧州情勢に一喜一憂	4 - 5
		予想レンジ: 73.50 ~ 78.50円	

※通貨ペアをクリックすると、そのページにジャンプします



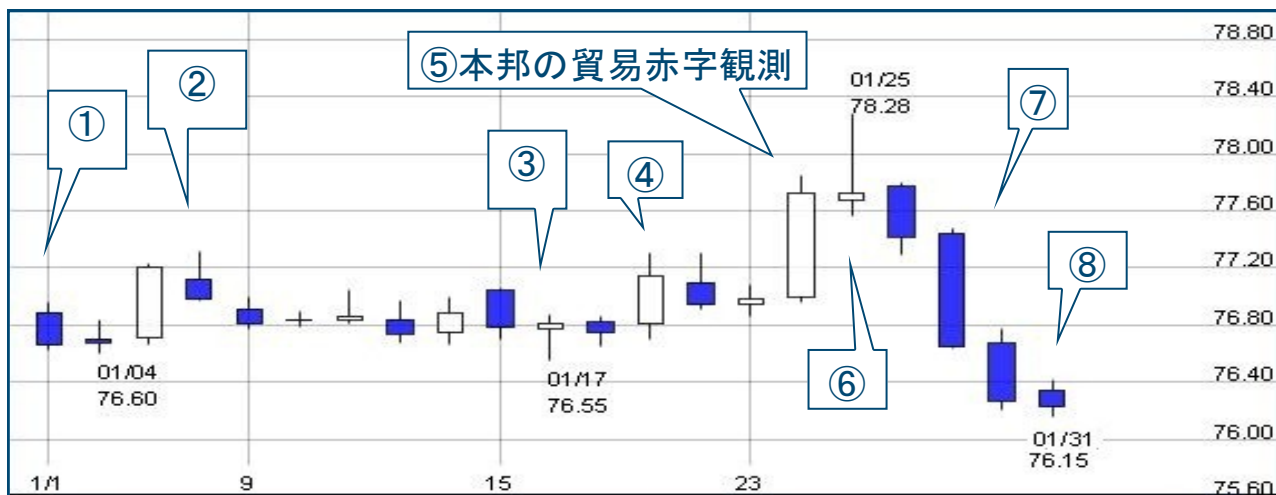
本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。

Copyright©2012 Gaitame.com Research Institute Ltd. All Rights Reserved. www.gaitamesk.com

USD / JPY

ドル/円 1月の推移

	始値	高値	安値	終値
四本値	76.89円	78.28円	76.15円	76.23円



①	3日、米連邦公開市場委員会(FOMC)議事要旨では「1月会合では出席者のFF金利見通しの発表を開始」「多くのメンバーがさらなる緩和策が必要と考えている」「一部メンバーが2013年半ばまで低金利を維持、とする文言を間もなく調整する可能性がある」と指摘「何人かはインフレが当面、目標水準を下回る可能性がある」と懸念「何人かはインフレや景気の見通しを踏まえ、現在の緩和的な政策を中長期で維持することは不適切と判断」等と意見が交錯していた。ただ、ドル/円の反応は限られた。
②	6日、米12月雇用統計は失業率が8.5%(市場予想:8.7%)、非農業部門雇用者数は20.0万人増(同:15.5万人増)と予想よりも大幅に良好な結果になった。これを好感して、発表直後のドル/円は77.32円まで急激に上昇。ただし、非農業部門雇用者数が市場予想値を大幅に上回るとの期待が発表前から広がっていたこともあり、すぐに失速した。
③	17日、欧州株が堅調な上、スペイン国債入札が無難に終了したことなどをを受けてユーロ/ドルが上昇すると、ドル/円でもドル安が進み、76.55円まで下げた。しかし、欧州株の堅調さを背景にクロス円で全般的に円安が進んだこともあり、その後のドル/円は下げ幅を縮小した。
④	19日、米新規失業保険申請件数が35.2万件(同:38.4万件)と、2008年4月以来の好結果となった。発表直後のドル/円の反応は限定的だったが、その後の米債券市場にて、これが好感されて米国債利回りが上昇すると、ドル/円でもドル高が進んだ。
⑤	24日、まとまったドル買い・円売りをきっかけに、ストップを絡めながらドル/円は上昇。一部で「日本の財務省が25日に発表する貿易統計で、2011年通年の貿易収支が31年ぶりに赤字へ」との見方が広がった上、米紙WSJが「仮に貿易赤字が続けば日本は安定した債権国から純債務国に転じる可能性がある」と報じたことなども円売り要因視された模様。
⑥	25日、本邦2011年貿易収支が31年ぶりに赤字となったことなどをを受け、円安が進行。78.28円の高値をつけた。しかし、米連邦公開市場委員会(FOMC)の声明にて、異例の低金利に据え置き期間を「2013年半ばまで」から「2014年後半まで」に延長したことをを受けて米低金利政策の長期化観測が広がり、ドルが急反落した。
⑦	27日、朝方にストップロス巻き込んで急落。さらに、米第4四半期GDP・速報値が前期比年率+2.8%と予想(+3.0%)を下回ったこと等を受けて下げ幅を拡大した。
⑧	31日、米1月シカゴ購買部協会景気指数(結果:60.2、予想:63.0)や米1月消費者信頼感指数(結果:61.1、予想:68.0)が予想より弱く、米長期金利が低下すると、ドル/円は76.15円まで値を下げた。

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

USD / JPY

今月のポイント

2012年1月のドル/円相場は76.15円～78.28円のレンジで推移し、月間の終値ベースでは約0.9%の下落(ドル安・円高)となった。基本的に、為替相場の関心が欧州の債務問題に集中する中で、為替相場の主役がユーロである状況に変化はなく、ドル/円は中旬くらいまではユーロ/ドルとユーロ/円が同方向に動くその狭間でもみ合いとなった。しかし、下旬に入ると、①日本の2011年貿易収支が31年ぶりに赤字になったことを受けた円売り、②米連邦公開市場委員会(FOMC)の声明を受けて米低金利政策長期化観測が広がったことを受けたドル売り、という要因が加わり、急激に上下動。昨年10月31日の円売り介入後の安値を更新するなど、最終的にはドル売り優勢で終了した。

今月も基本的に欧州の問題が軸になってくる状況に変化はないだろう。ギリシャへの第2次支援、欧州安定メカニズム(ESM)を合意に至っている5000億ユーロから増額するかどうか、さらにポルトガルなど、ギリシャ以外の問題国についての不安など、ユーロの手掛かり材料には枚挙に暇がない。引き続きユーロに対して円とドルが同じ方向に動くため、ドル/円は方向感が出にくい展開となりそうだ。しかし、米経済指標の結果に弱いものが目立ち、米国の低金利政策の長期化観測が根強く意識される場面が頻発するようだ、ドル売りの方がやや優勢となると見る。とはいえ、75円台では本邦政府・日銀による円売り介入も意識されるため、よほど介入を要求するような急激な円売り・ドル買いが続かない限り、下値の固さも相当なものとする。(ジェルベズ)

(予想レンジ: 75.20～78.50円)

今月の注目材料

※発表日時は予告なく変更される場合があります。※予定一覧は信頼性の高いと思われる情報を元にまとめておりますが、内容の正確性を保証するものではありませんので事前にご留意くださいますようお願いいたします。

日付	経済指標、イベント等	日付	経済指標、イベント等
2/1(水)	1月米ADP全国雇用者数	2/16(木)	2月米フィラデルフィア連銀景況指数
	1月米ISM製造業景況指数	2/17(金)	1月米消費者物価指数
2/3(金)	1月米雇用統計	2/20(月)	1月日通関ベース貿易収支
	1月米ISM非製造業景況指数		ユーロ圏財務相会合
2/10(金)	12月米貿易収支	2/21(火)	EU財務相理事会
	1月ミシガン大消費者信頼感指数・速報値	2/24(金)	1月米新築住宅販売件数
2/14(火)	日銀金融政策決定会合(13日～)	2/28(火)	1月米耐久財受注
	1月米小売売上高		2月米消費者信頼感指数
2/15(水)	2月米ニューヨーク連銀製造業景況指数	2/29(水)	第4四半期米GDP・改訂値
	1月米鉱工業生産		1月米シカゴ購買部協会景況指数
	FOMC議事録(1月24・25日分)		米地区連銀経済報告(ページブック)
2/16(木)	1月米生産者物価指数		
	1月米住宅着工件数		

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

CAD/JPY

カナダ/円 1月の推移

	始値	高値	安値	終値
四本値	75.45円	77.58円	74.53円	75.99円



①	3日、中国12月非製造業PMIが56.0と前月(49.7)から上昇した事や、米12月ISM製造業景況指数が53.9と予想(53.5)を上回った事を好感してNYダウ平均が一時260ドル超の上昇となるとカナダ/円は76.16円まで上値を伸ばした。イランが2日にペルシャ湾でミサイル発射試験を実施したとの報道を受けて原油価格が103ドル台まで上昇したこともカナダドルの買い材料となった。
②	6日、加12月雇用統計が失業率7.5%(予想7.4%)、雇用ネット変化1.75万人増(予想2.00万人増)と弱い結果となった事を受けてカナダ/円は売りが先行。その後、米12月雇用統計が失業率8.5%(予想8.6%)、非農業部門雇用者数20.0万人増(予想15.5万人増)と強い結果となった事を受けて時間外のNYダウ先物や原油価格が上昇するとカナダ/円も75.87円まで反発したが、現物のNYダウ平均株価が下落して始まり、さらに下げ幅を拡大すると75円ちょうどを割り込んで反落した。
③	9日、独シュピーゲル誌が7日に「国際通貨基金(IMF)は、ギリシャの財政再建や債務削減を遂行する能力に対して信頼感を失いつつある」と報じた事や、この週に行われるスペインやイタリアの国債入札への警戒感からユーロ売りが先行しユーロ/円が2000年12月以来の安値まで下落するとカナダ/円もつれ安となり74.53円の安値まで下落した。
④	17日、中国第4四半期国内総生産(GDP)や独1月ZEW景況感調査が予想を上回った事に加え、スペインや欧州金融安定基金(EFSF)の短期債入札が前日の格下げ(S&P)にもかかわらず順調に消化された事などからリスク選好ムードが広がりカナダ/円は75.89円まで上昇した。その後、カナダ中銀(BOC)は政策金利を1%に据え置き、声明では「経済は2011年下半年に予想以上に勢いづいた。その一方で、今後の成長ペースは主に海外環境により従来予想よりも緩やかになると見られる」としたが、今後の利上げを示唆する手がかりは示さなかったため、カナダ/円の反応は限定的であった。
⑤	25日、本邦12月貿易収支の発表を受けて、2011年通年で31年ぶりの貿易赤字(-2兆4927億円)に転落した事を手掛かりに円売りが強まると、カナダ/円も上昇した。さらに、米連邦公開市場委員会(FOMC)で2014年終盤までゼロ金利を続ける方針が示された事を受けて、原油や米国株が上昇するとカナダ/円は77.42円まで上値を伸ばした。
⑥	27日、ドル/円がポジション調整からストップロスを巻き込んで下げ足を早めると、クロス円も下落した。その後、米第4四半期国内総生産(GDP)が予想を下回るとドル/円が一段安となるとともに、米国株価も下落。カナダ/円の下げは加速し、76.50円まで値を下げた。

CAD/JPY

今月のポイント

1月のカナダ/円相場は74.53円～77.58円のレンジで推移し、月間の終値ベースでは0.7%の小幅な上昇(カナダドル高・円安)となった。月初こそ軟調推移が目立ったが、中旬以降は、ユーロ圏周辺国の国債入札に好調な結果が相次ぎ、利回りが大きく低下するなど、債務問題に対する過度の懸念が和らぐ中、カナダ/円は買い優勢となった。米連邦公開市場委員会(FOMC)が、これまで2013年半ばとしていた低金利の継続見通しを2014年終盤まで延長した事を受けて株や資源価格が一時上昇した事もカナダドルを支援した。しかし、終盤には、ポルトガルの2013年の市場復帰は困難でありギリシャ同様に追加支援が必要になるとの見方から同国国債利回りが大きく上昇するなど、欧州債務危機の拡大懸念が再燃した事からカナダ/円は反落する事になった。

2月も欧州情勢が最大のリスク要因である事は間違いないだろう。カナダ/円は当面、ギリシャやポルトガルの動向、さらには大量の国債償還を迎えるイタリア情勢を睨んで一喜一憂する展開が続くそう。カナダ国内では、3日の1月雇用統計、8日の1月住宅着工件数、17日の1月消費者物価指数、21日の12月小売売上高などが注目される。3月8日のカナダ中銀(BOC)理事会に向けて、将来の金融政策に対する思惑も手掛かり材料となる可能性がある。その他、カナダはG7唯一の産油国であるため、原油価格の動向にも注目しておきたい。米国の超低金利政策長期化観測やイランを中心とした中東情勢の悪化はいずれも原油高材料となりうるが、中東情勢の悪化についてはリスク回避の動きにつながる可能性もあり、注意が必要であろう。(神田)

(予想レンジ:73.50～78.50円)

今月の注目材料

※発表日時は予告なく変更される場合があります。※予定一覧は信頼性の高いと思われる情報を元にまとめておりますが、内容の正確性を保証するものではありませんので事前にご留意くださいますようお願いいたします。

日付	経済指標、イベント等	日付	経済指標、イベント等
2/1(水)	1月米ADP全国雇用者数	2/14(火)	日銀金融政策決定会合(13日～)
	1月米ISM製造業景況指数		1月米小売売上高
2/3(金)	1月加雇用統計	2/15(水)	FOMC議事録(1月24・25日分)
	1月米雇用統計	2/16(木)	1月米住宅着工件数
	1月米ISM非製造業景況指数	2/17(金)	1月加消費者物価指数
2/6(月)	1月加Ivey購買部協会指数・季調済	2/20(月)	1月本邦通関ベース貿易収支
2/7(火)	12月加住宅建設許可	2/21(火)	12月加小売売上高
2/8(水)	1月加住宅着工件数	2/24(金)	1月米新築住宅販売件数
2/9(木)	1月中国消費者物価指数	2/28(火)	2月米消費者信頼感指数
2/10(金)	2月米シガン大消費者信頼感指数	2/29(水)	第4四半期米GDP・改定値

巻頭の特記事項を必ずお読みください。